

どくだみ

池松 孝子

どくだみは十を超える優れた効能があることから「十葉」という名がついている。白い花びらのように見えるのは葉の一種で、真ん中の棒状の穂の部分に黄色の小花がたくさん集まっているのが雄しべである。四枚の花びらのような苞から見ると、十字形になっていて、その端正な姿は清潔な印象を与える。

どくだみが群生していたのは、薄暗い湿気のあるところだったように記憶している。地下茎で横へ横へと伸びて、抜いても抜いても増殖する。さらに嫌なのがあの不快な匂いだ。それもしぶとく手に残る。それが何とも鼻につく。子供の頃のこうした経験から大人になっても、その花を美しいと感じるなど思いもよらないことで好きにはなれなかった。

どくだみや真昼の間に白十字

川端 茅舎

人は長年刷り込まれた、特に負の経験からはなかなか脱却できないもののようなのだ。時にそれが偏見を生むことにもなる。だが「こんなことで」と思われるような小さな経験で、刷り込みから抜け出せるものでもあるようだ。

益子の窯元や展示場などの並ぶ大通りから少し奥まった所に小高い山がある。そこを登り切ると、鄙には稀など言ったら失礼だろうか、瀟洒な蕎麦屋が見えてくる。店のたたずまい、調度品、供される器などれをとつても心憎いばかりに亭主の気遣いを感じる。

その洗面所が忘れられない。手入れの行き届いた棚に益子焼の一輪挿しが置かれていた。そこに立ち姿の美しいすつくと伸びた純白の十字の花が生けてあった。それを目にした瞬間、これまでの思いが一変した。

今まで見ていたどくだみと同じものかと困惑した。傍にある漆塗りのペーパーボックスの紙に手をやりながら、小さな空間をこのようにしつらえた亭主のもてなしを心洗われる思いでしばらくじっと見入っていた。手洗いは本来の目的から言って、このような感動を与えられるものであつたらうか。

あれから嫌な臭いも気にならなくなった。それどころか茶花を見る思いになつていく。